

【論文】

エコシステム構想をめぐる手法と支援ツール

－ ソーシャルワーク実践へのチャレンジ －

太田 義弘，西梅 幸治

Procedure related to Ecosystem Projects and the Life-Enhancing Tool
-Challenging Social Work Practice-

Yoshihiro Ohta and Kouji Nishiume



2011年3月

総合福祉科学研究

Journal of Comprehensive Welfare Sciences

【論文】

エコシステム構想をめぐる手法と支援ツール

ーソーシャルワーク実践へのチャレンジー

太田 義弘* , 西梅 幸治**

Procedure related to Ecosystem Projects and the Life-Enhancing Tool
–Challenging Social Work Practice–

Yoshihiro Ohta and Kouji Nishiume

要 旨

中範囲概念としてのエコシステム構想は、ジェネラル・ソーシャルワークの理論を展開した科学的で専門的な方法とその実践である。本論考の目的は、エコシステム構想の推進と、ソーシャルワーク実践における支援ツールの信頼性と妥当性について検証調査から考察したものである。内容は、以下のように構成されている。

- I はじめに
- II ソーシャルワーク実践の課題と考察目的
- III 支援ツールをめぐる課題
- IV エコスキャナーの検証調査
- V おわりに

Abstract

Ecosystem Projects as middle range concepts are the scientific, professional method and practice. They are consisted of developing general social work theories. This study aims at progressing the method of Ecosystem Projects, and it inquires into the reliability and validity through verification survey by using Ecoscanner as the life-enhancing tool in social work practice. The contents are constituted as follows.

- I Preface
- II Issues of social work practice and purpose of this study
- III Tasks related to the life-enhancing tool
- IV Verification survey related to Ecoscanner
- V Conclusion

● ● ○ **Key words** ソーシャルワーク実践 Social Work Practice / ジェネラル・ソーシャルワーク General Social Work / エコシステム構想 Ecosystem Projects / 支援ツール The Life-Enhancing Tool / エコスキャナー Ecoscanner

受付日 2010.9.22 / 受理日 2010.11.10

* 関西福祉科学大学 社会福祉学部 教授 / ** 高知女子大学 社会福祉学部 講師

I はじめに

最初に本論考への課題意識と立脚点、そこを基点にした理論と方法、さらに具体化する構想について、先行研究からの経緯を簡単に紹介し、考察の意義を提起しておきたい。

用語としてのソーシャルワークの普遍化が、他方では、得体の知れない社会福祉に関連した活動の総称として定着しかかっている。社会福祉は、その人自身の幸せに関連した相対的な概念であるところから、それを提供する施策によって最低基準として提示することはできても、社会福祉を共通な概念で尺度化して理解することはできない。そのために抽象化され、事例などを通じて解説されてきた。しかし、それは利用者のためにと称しながら一連の対応する社会的施策としての側面から特性を解説しているに過ぎない。

長年継続してきたソーシャルワーク教育と研究に基点をおきながら、他方では実践現場での臨床活動に参画することから、このような社会福祉を一時的な対応施策としてのみとらえる視野や発想の転換の必要性を痛感してきた。何よりも利用者の立場から実践を通じて施策をとらえ直し再構成することの重要性を機会あるごとに指摘してきた。そのアイデアがジェネラル・ソーシャルワークである。その立脚点を変えるためには社会福祉とソーシャルワークについて、概念を峻別することが必要である。そこから曖昧に理解されてきた概念を精緻化し、分析・体系化することから高度専門職として利用者との参加と協働に立脚したソーシャルワーク実践概念の固有性と不可欠な方法を明示することが可能になる。両者のもつ特性をシステムとして分析し、一方では、両者のシステム関係つまり構造や機能を解明し、他方では、両者の特性把握から不可分の実体理解が可能になるし、実践活動としてのソーシャルワークの固有性が定立することになる。

繰り返すことになるが、それは社会福祉を伝統的な施策と計画、実践と評価などからなる混成・総合概念として政策的にとらえるのではなく、発想を変え利用者の立場から実践の成果として状況改善や実感に裏付けられた現実の評価を課題にする実践概念としてとらえ直してアプローチすることである。混乱している広義の社会福祉概念を、狭義の究極目標である利用者との参加と協働からなる実践概念としてとらえ直したい

わけである。それはソーシャルワーク実践として人間と環境、時間と空間、意味と固有性からなる利用者の生活コスモスに働きかける包括・統合的な実践的基盤と科学的方法を意味している。そのアイデアをジェネラル・ソーシャルワークと称してきた。

政策論的社会福祉論に対して、実践としての人の生活コスモス支援から成果のフィードバックを通じた施策の微調整や再編をも視野にいった包括・統合的なソーシャルワーク実践論の展開である。エコシステムとは、そのような利用者の生活コスモスを基点にした視野と発想をいうわけで、そのアイデアの展開に支援ツールを介在させ利用者とソーシャルワーカーとが協働し、固有な広がりや流れ、内容や意味をもつ生活コスモスへと専門的かつ科学的に肉迫する方法がエコシステム構想である。

ソーシャルワーク実践を構成する理論的枠組み、固有な対象、実践への視座、方法としての過程特性、それらを前提にした理論と実践を統合化する支援ツールの活用と利用者の実存的な生活コスモスに迫る一連の構想を、長年の歳月をかけてかなりの文献や著論にまとめて提示し紹介してきたところである。何分にもこれらの著作の意図や内容、方法のもつ真意を、読者に的確に理解していただくことの限界を自覚し、機会あるごとに成果を公刊し¹⁾補足をしてきたところである。しかし、筆者のこだわる文章表現の問題や構想そのものがエコシステムという抽象度の高い概念を扱っていることから、その溝を埋めねばならない課題は山積している。本論考も早くから指摘を受けていた課題について考察したもので、憶測や誤解を解き構想を活用することの真意が理解されることの一助になればと願っての緒論である。

II ソーシャルワーク実践の課題と考察目的

1 ソーシャルワークをめぐる背景と課題

ジェネラル・ソーシャルワークやエコシステム構想についての紹介を試みて以来20年余りが経過する。また、一方で社会福祉士教育と関連して社会福祉援助技術という用語の台頭からソーシャルワークに対する関心は拡大しつつあるものの、社会福祉援助技術の別名あるいは実践活動の総称として曖昧な理解が浸透し

てきているのも気がかりである。また、北米での伝統的なジェネリックやスペシフィックあるいは、それらを今日的に類型化したジェネラリストやスペシャリスト・ソーシャルワークと、ジェネラル・ソーシャルワークとが混同して誤解されたり、エコシステム構想を含め、それらの厳密な理解や浸透には克服しなければならない課題が山積している。

そこで本論考は、それらへの誤解の払拭を意図したものであると同時に、特にエコシステム構想をめぐる手法の意図や展開についての反応や疑義と憶測や誤解に答えようとするものである。またジェネラリスト・ソーシャルワークに対してジェネラル・ソーシャルワークとの意図や特性さらに方法などの比較考察については、機会を改めて論考を深めてみたい。

社会福祉士の資格制度が発足して20年余りが経過し、近年のカリキュラム改訂にみられるように利用者の現実寄り添える社会福祉教育へとさらなるチャレンジが進行してきている。確かに資格教育を反映して実践現場が変革を遂げてきている動向を身近に感じ取ることができるようになってきた。人の幸せにかかわる社会福祉という広大な事象には、各種の専門分野に立脚した専門家の協働が不可欠である。そのためには利用者への支援業務としてソーシャルワーカーの固有性と地位や役割が、厳しく問われるようになってきている。利用者のニーズに応じて慣れや勘と経験からなる属人的な特性に期待した業務では、体のいい便利屋に過ぎないからである。

ソーシャルワーク実践をめぐる背景と課題には厳しい現実がある。すでに諸般の概況は指摘してきた²⁾ところであるが、世界的な経済危機を背景に国内での経済不況から、少子・超高齢社会での利用者ニーズの拡大と切迫、過酷で劣悪な実践現場、従事者確保と定着の困難性、専門性と乖離した介護業務への専従など市場原理導入から福祉産業の台頭を煽る悪循環、走狗を担う安易な国家資格の設置と認定や付与、一方で資格教育を標榜し急速に拡大・成長した社会福祉教育の低迷、教育理念と離反した教育内容と就職状況、学生の敬遠・離脱による質の低下、後継者養成への危惧などに影を落としてきている。

実践現場でも、有能な人材確保や定着などへの危機感、マニュアル化された画一的業務、業務基準の未確立でマージナルな業務内容、専門性とも離反した過渡

的な専従業務などから固有実践業務が不透明で、社会福祉行政への手続きや取り次ぎサービスに埋没している現実がある。また、その背景にあるソーシャルワーク実践研究も、先に指摘してきたように概念と実体に共通理解を欠いたままソーシャルワークという用語が多用されるようになり、実践の代名詞として重宝されて独り歩きをしている。研究活動も隣接科学との学際的研究に埋没し固有性を喪失した研究動向や、実践現場と共同した固有な継続研究は希少であり、蓄積してきた実践に役立つ成果の還元などはまだ今後に残された課題である。それに対して北米や北欧での実践試行などには大いに関心があり、十分な検証もなく摂取して無定見な摘み食いので一世を風靡する伝統的な風潮などに憂慮する現実がある。

社会福祉施策、社会福祉関連資格制度、社会福祉サービス、社会福祉の実践現場と従事者、社会福祉教育、実践研究などのソーシャルワーク実践をめぐる背景や現実には克服されねばならない課題が山積している。

2 課題考察の目的

指摘してきたような背景や課題に対して、さまざまな対応する動向がある。日本社会福祉学会の社団法人化は、社会福祉関係学会を総括する総合学会として、会員の拡大・統括という組織の整備から会員各自の研究・実践成果の発表と情報交換の場として学会水準の向上を目指し量から質へと一大変革を志向しつつある。傘下にある各種学会も歩調を一にしている動向がある。社会福祉教育では、日本社会福祉教育学校連盟が、社会福祉教育の水準と専門性や教育課程と教育内容の向上を目指して研究と実践さらに情報の交換を通じた成果を蓄積してきている。また、日本社会福祉士養成校協会が、資格制度の維持と向上を目指して教育者の研修と訓練、実践現場と協働しながら従事者の育成と高度な専門性を維持できる職場の開発などに取り組んできている。

一方で、日本社会福祉士会は、社会福祉法の一部改正による国会での付帯決議を受けて、有国家資格者に高い専門性を認証する専門社会福祉士認証システムの構築に向けての策定作業を推進してきている³⁾。職能団体として社会福祉士の継続教育と能力開発を目指し、将来的には職場や地域でリーダーシップや専門性

を發揮し後継者養成にも参画できるようなキャリアパスを描いている。そこではキャリア形成過程として、第1段階は職場でのリーダーシップを目指した「認定社会福祉士」、さらに第2段階は、地域を中心に組織システムづくりに参画する「認定専門社会福祉士」と専門性や経験の蓄積を評価し認証して、高度な専門職業としての将来像を具体化し、2012年度から制度として施行する計画が進行してきている。

このようにソーシャルワーク実践をめぐる背景や課題などが山積する外堀は、マクロの視野から多角的に改善へと埋められる動向が進展しつつある。つまり施策としての社会福祉というハード福祉の観点は前進するものの、しかしソフト福祉としてのソーシャルワーク実践という観点は依然として五里霧中であり、支援活動の専門性や科学性など方法をめぐって足元は手探り状態である。

社会福祉士資格制度教育カリキュラムが改定されてきた。まだ教育現場は、その変革された視野や発想を十分に咀嚼して学生に伝えるのに時間がかかっている。それは一方でソーシャルワークというソフト福祉の側面が重視され展開方法へと視野や発想が一大変革をしてきたからである。社会福祉の究極目標は、その人にとっての生活という固有で独自の生活コスモスにかかわり、広大で包括・統合的な均衡したシステムからなる生活世界を支援することになるからである。利用者を支援者のもつ技術や技法で普遍化してとらえ対応する方法ではなく、利用者の生きる世界からとらえ直して迫ろうということだからである。

このような経緯を背景にして、ソーシャルワークにとって喫緊の課題は、実践方法の刷新と科学化ということになる。エコシステム構想は、その課題に早くからチャレンジしてきたところである。その目的は、すでに以下のように指摘してきている⁴⁾。

- (1) 原点に回帰した視野と発想の固有性を追究
- (2) 理論と実践との包括・統合的方法の定式化
- (3) 特性としての生活支援過程の深化
- (4) 方法としての科学的・専門的・実存的支援の推進
- (5) 生活コスモスのエコシステムの可視化と状況の共通理解
- (6) 支援ツールを介した参加と協働の支援と自己実現
- (7) 支援過程局面に対応した技術と技法の展開
- (8) エコシステム構想に基づく実践方法の敷衍

これらはエコシステム構想そのものの特性であると同時に、この構想が目指す多角的な目的でもある。

ソーシャルワーク実践の理論的枠組みにシステム理論を用いて構成し、一方で利用者の生活コスモスという生態的なシステムを解析する枠組みにも、この理論を援用している。そして特殊な生活コスモス状況を解析された情報のシミュレーションで整理する方法などのアイデアや手順を、論理的に構成してきたところであるが、システム思考を用いた枠組みや生活コスモスへの応用の複雑性から、エコシステム概念の抽象度の高さが敷衍の妨げになっているとも考えられる。

アイデアや理論的枠組みに対する正面からの疑義は側聞していないが、コンピュータ活用の方法と支援の手法については、疑義や批判があることを真摯に受けとめている。本論考の直接的なねらいは、エコシステム構想に関心を寄せてくれている方々への疑問に一步でも肉迫し、理解を深めていただきたいからである。

3 エコシステム構想の意図

日本の社会福祉教育は、戦後まもなく北米での大学院教育を参考にして教育課程が編成されてきた。しかし、広く社会科学的特徴を含め社会問題に対応する傾向と、人間科学として北米の動向を色濃く示したもののなど多様で、大学の建学の精神を反映した特性を教育課程に具体化して、社会福祉教育は進行してきた。その後の高度経済成長や技術革新に支えられ高齢社会の出現とともに、社会福祉問題が一世を風靡するようになった。そして時代の要請に応え社会福祉界への人材育成を目指して、社会福祉教育が急速な拡大を遂げるとともに、また社会福祉の基礎構造改革と社会福祉士の国家資格制度の制定で最高潮に達して以来20年余りが経過をした。

社会福祉士制度は、日本の社会福祉教育を一大発展させる一方で、さまざまな予期せぬ弊害を併発させることになってきた。それは促成の教育産業の台頭に温床を貸すことになり、有資格教員の枯渇からマスプロ教育を助長し、国家資格取得を目標にした社会福祉教育課程の画一化と、実体のない知識偏重の教育、さらに就職先の過酷な業務が敬遠され、受験生の社会福祉離れと質の低下などの悪循環を生み、高度専門職の展望とは反した厳しい現実におかれている。

そこで今われわれ教育・研究に携わるものに課せられている責任は重大である。マクロな背景や課題に対する可能なチャレンジもあるであろうが、何よりも実践現場と提携したソーシャルワーク実践と業務の敷衍が喫緊の課題であると考えられる。ソーシャルワーク実践とは、固有な利用者の生活コスモスへの視野や発想を立脚点に、よりよい生活を求めての人生に寄り添う特殊な専門的支援業務であり、生活の断片領域的な問題解決ではなく、それらをエコシステムとして包括・統合化した生活や人生というコスモスへの対応で支援しようとする活動である。

エコシステム構想は、それを具体化するアイデアであり方法である。その意図は、構想の目的を反映して、①理論と実践の一体化である。この課題は古くから指摘されていることではあるが、批判的に理論とは何かという、現実実践への倫理や原理からなる支援者に内在化された行動規範を意味しており、科学的な実践体系として共通理解される枠組みがない。したがって、属人的な資質としてのコンピテンシや勘と経験に依拠してきた。それに対して本構想が主張する理論と実践の一体化とは、実践体系を構成する枠組みを明示し、それを実践場面で一体化して推進するために中範囲概念を用いて昇華し統合しようというアイデアである⁵⁾。

次に、②ソーシャルワーク実践の固有性についてである。再三言及してきているように、利用者自身の生活コスモスへのチャレンジである。実践の主体は利用者であり、利用者をめぐる人と環境からなる生態的なシステム状況、つまり生活をいかにとらえてアプローチするかということになる。この把握は容易なことではない。利用者の生きるコスモス状況をどのような枠組みで解析すれば、利用者の実存に迫ることが可能になるのか。ここにもシステム理論の活用から枠組みを提示している。この視野や発想、そこでの方法や技術は、ソーシャルワークの固有性そのものということができよう⁶⁾。

このアイデアを実現するには生活をめぐる膨大で多様な情報の収集と処理が必至である。そこで、③コンピュータの活用が不可欠な支援ツールとして登場することになる。生活領域の構造化、それらが相互に交流して果たす機能、生活内容のもつ意味と生活の流れとを、システム化された構成子からなる質問に答えるこ

とで、情報処理シミュレーションが可能になるように設計されている⁷⁾。コンピュータを用いて情報の処理をすることの目的は、④生活コスモスのシステム化された状況をビジュアル化して、理解を促進することにある。

さらに、この構想の重要なところは、支援ツールの活用方法にある。コンピュータを介して、⑤利用者と支援者とが実存的な出会いを深めることにある。情報の確認や補足さらに意味について相互理解を深め、在りのままの生活状況を共有し、自己実現への可能性を模索することにある。そして、今ひとつ重要なことは、何よりも⑥利用者自身の参加や協働する姿勢を育て課題解決への主体性を高めることにある。自らの生活コスモスについての関心を深め、エコシステム状況への対応を自ら計画し遂行できるような成果をねらっている。

Ⅲ 支援ツールをめぐる課題

1 支援ツールの役割

このようなエコシステム構想の意図について、その特徴を公刊した著作などにて事例をふまえて解説したり、学会やセミナーでのワークショップ、あるいは事例研究会などにて解説を重ねてきているのだが、大半は関心をもって耳を傾けていただけるものの、時折予期せぬ疑義や反論に出会うことがある。利用者と支援者とが支援ツールを介して実践を遂行するアイデアそのものに異論はないが、支援ツールの機能や役割あるいは情報処理をめぐる問題である。

一つは、大前提にソーシャルワーク実践という人間存在の意味や価値にかかわる課題にコンピュータは馴染まないという立場である。これには利用者支援への実存的な意図についても解説するのだが、意識や信念レベルの価値観からなる問題で共感や理解を期待するには限界がある。他方では、支援ツールを活用した研究法をめぐる調査方法や統計学的な検証を科学化する方法や手段についての疑義や批判である。このことについては、本論のⅣ章にて調査研究を通じて対応を考察しているので、アリバイ証明のような理論武装とは理解せず内容の検討をいただきたいと願っている。

また、その他にも早計な思い込みから生ずる誤解に

出会うこともよくある。これについては、次節で支援ツールを活用した支援手法として解説しているが、支援ツールが果たす機能についての問題である。

支援ツールは、あくまでもソーシャルワーク実践に介在させる道具に過ぎない。実際には、支援に必要な情報の収集とシステム化した迅速な処理、結果の整理とビジュアル化などへの機器のもつ機能を道具として利用している。利用者には、コンピュータに対する疑心暗鬼から抵抗を示す方も少なくないが、その使用方法についての説明には納得していただけるようである。現場で活躍するソーシャルワーカーにも、実際に支援ツールを用いた試行作業をしていただくことで大半の方が好意的な関心を示してくれることが多い。

それに対して、文献の通読や学会報告などからコンピュータの活用方法についての疑義が時折ある。つまり、支援ツールが利用者の問題状況を評価し、改善方法を示唆や判断をするのではないかとの先走った誤解である。それは支援ツールが自動的に、①状況の診断と計画の予見、②生活内容の解明、③科学的生活理解、④支援活動への指示や提言、⑤活動の効率化と機械化、⑥科学的実践の展開⁸⁾などを断定し評価するのではという錯覚である。コンピュータに対する過大な期待と同時に、専門性の名のもとにコンピュータによって科学的な状況判断を可能にするとの方法への疑義である。医師が、X線透視やMRIあるいはCTスキャンなどの医療機器を用いるのと同じで、機器が診断や治療をするのではなく、専門家としての判断に情報を提供するに過ぎないのと同様である。

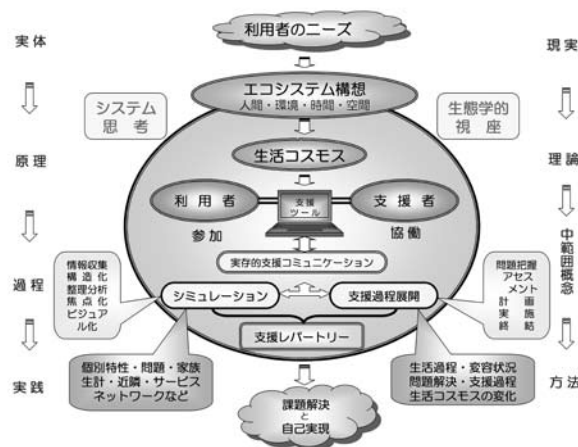
その場合、医療では取り扱う事象の特性から自然科学的に客観化できる手法を用いることが可能であるが、ソーシャルワークの場合は、状況に対応して変化する利用者の生活が対象であるため相対化して考察しなければならない。そのためにEBPの目指す実践の科学的手法と同時に、他方ではポストモダニズム論的な実存的実践の統合化⁹⁾への志向が一大課題となることに特殊性がある。

2 支援ツールの手法

このような一連のソーシャルワーク実践への支援ツール活用による科学的かつ実存的な支援過程のイメージを図示すると図Ⅲ-1のようになる。コンピュー

タ活用への誤解を払拭するために、少し解説をしておきたい。この図を上から下へ、さらに左右に注意しながら見ていただきたいのだが、①利用者の現実が生活の実体からなる解決課題としてもちこまれてくる。②対応する理論と原理を実践へと一体化したアイデアがエコシステム構想で、これが方法としての枠組みである。③アプローチとしての中核をなす対象が利用者の生活コスモスである。この場合、利用者とは個人を指すだけではなく、家族や関係者、共通な関心や利害をともにする小集団、さらに地域の住民や職場などを想定していただきたい。次に④支援ツールを介在させて利用者と支援者とが参加・協働して課題解決に向きあうことになる。⑤そこでの双方の役割は、表Ⅲ-1のようにまとめられる。ここでは情報の収集とアセスメントの過程をとりあげているが、プランニングやインターベンション、さらに評価などの過程局面での固有な役割の展開があることはいうまでもない。

図Ⅲ-1 エコシステム構想のイメージ



表Ⅲ-1 利用者と支援者の役割¹⁰⁾

	情報収集過程	情報認識過程
支援者	<ul style="list-style-type: none"> 人と環境からなる生活を構造化し、機能を把握できる情報の収集 それらの特徴を把握するため生活コスモスを構成する多様な因子をとらえる質的から情報を収集 支援過程の進展に対応した変容状況をエコシステムとしてとらえるため数次にわたる情報収集と処理 	<ul style="list-style-type: none"> ビジュアル化による生活の包括・統合的状況を把握 生活コスモスのエコシステム状況と生活問題や利用者のコンピテンシについてのアセスメント 変容状況から支援効果と今後の支援プランへの専門的判断
参加と協働	エコスカパーを介した双方の役割	
利用者	<ul style="list-style-type: none"> 生活状況やそこでの問題を十分に説明し支援者に詳細な情報の提供 生活コスモス把握へのエコシステム情報をえる質問項目に回答 数次にわたる情報処理から変容状況理解への関心と自己啓発 	<ul style="list-style-type: none"> ビジュアル化による生活の全体状況の確認と理解 エコシステム状況から生活コスモスや生活問題の理解、さらに自己認識と潜在化したコンピテンシの意識化 変容状況の理解から自助努力の効果と今後の対応へのプランを検討

その役割遂行のために、⑥コンピュータ・シミュレーションを活用し、その中心は過程の展開から実存的な支援コミュニケーションが繰り返されることになる。それに対してコンピュータは、情報の収集、情報の構造化、整理分析、情報の焦点化、ビジュアル化への情報処理と提供に過ぎない。そして、双方による参加と協働の支援過程は、問題の把握、アセスメント、計画、実施、終結へと局面を追った役割関係で展開されることになる。この支援過程に有効な情報提供をするアイデアが理論と実践とをコンピュータで補助する中範囲概念つまりエコシステム構想である。

次に、⑦生活支援過程の展開に中心的な役割を果たすのは、対人支援コミュニケーションである。支援ツールという生活コスモスがある程度共通理解できる道具を用い、そこにはもちろん絶対化はできないものの理論と数量化した科学的知見を駆使し、利用者の生活コスモスに最接近した客観的状況の理解と、他方では、科学性に対して実存性¹¹⁾という利用者が実感している固有で深奥なコスモスに迫る働きへと視野や発想を広げる支援コミュニケーションが繰り返され、支援ツールを活用した実存的支援技術の展開が求められる。そして⑧利用者の現実に対応した支援レポートリーのもとに当事者に対する支援過程が局面を追って深められ状況改善、問題解決、他方では環境への働きかけを通じて課題解決や自己実現が可能になるという支援過程の流れを現している。

そこでの支援ツールを介した双方の役割は、参加と協働という責任性のもとに原理に基づいた多様な特性¹²⁾が求められており、その目標や過程、内容や関係などが表Ⅲ-1に例示できる。(太田 義弘)

3 支援ツールに対する疑義

エコシステム構想は、利用者の生活を認識するエコシステム視座を実践理論として具体化しようとする試みであり、実践場面での応用と展開を可能にするものであると指摘できる¹³⁾。その構想は、支援ツールを兼ね備えており、現在開発されているツールがエコシステムキャナーである。従来からエコシステム視座は、生活者としての「利用者やその問題に対して基本的な方向を示唆する抽象観念であり、メタファーであるが、インターベンション（介入方法）を指定することができ

ない」¹⁴⁾というメタ理論であり説明概念であることに問題を抱えていた。エコシステム構想と支援ツールは、その克服に向けたアイデアとして期待されている。

そのエコシステム構想は、中範囲概念として理解できる¹⁵⁾。中範囲概念は、社会学者のマートン (R. M. Merton) による中範囲理論から示唆を得ている。かれは、非常に抽象的で、ともすれば日常的な事実とかけ離れてしまいがちな理論研究や、具体的ではあるが調査を至上とした経験主義的な研究とは異なり、そのギャップを埋めていく中範囲の理論構築こそが社会学に必要とされることを指摘した。すなわちある程度の部分的な現象に絞り、系統立てて整理した理論を経験的な調査研究の累積的な成果に関連づける作業をとおして、観察可能なデータに支えられた理論構築を目指すことが重要であると指摘しているのである。

ソーシャルワーク研究は、社会事象をとらえていく社会学とは違い、利用者の生活とそれに応じた支援を対象とする支援科学を追究していくことに他ならない。支援科学では、実践にフィードバック可能な理論構築により、理論に基づいた実践展開の可能性と、さらには実践からのフィードバックによる理論へと昇華の可能性に意義が求められる。ソーシャルワーク研究に理論と実践との乖離が指摘されて久しい。エコシステム構想は、理論と実践の中範囲に位置することによりその乖離を埋めるチャレンジで、その1つの方向性が支援ツールの活用である。そのためあくまで支援ツールは、手段であり道具にすぎない。

さてエコシステム構想が中範囲概念として機能するためには、①ソーシャルワークで取り扱う事象を的確に把握・反映できるか、②ソーシャルワーク支援という目の前の利用者との実践で活用が有効であるか、という実践理論としての働きが問われることになる。例えば社会学では、理論が論理的整合性と経験的妥当性という、2つの基準によって判断されることが指摘されている¹⁶⁾。論理的整合性とは、理論が矛盾なく展開されていることであり、経験的妥当性とは、理論が事象を的確に再現しており、リアリティ豊かであることである。エコシステム構想では、これまで十分に検討されてきた論理的整合性を基盤に、経験的妥当性をいかに高めていくかが課題であることから実証的な検討が求められている。

その際には、例えば社会学では、豊かなリアリティ

が研究法に裏打ちされることによってはじめて事象がとらえられるといわれるように、研究法が重要となる。その研究法は、①数理演繹法、②統計帰納法、および③意味解釈法の3つに整理され、それらを総動員することが理想的であるとされている¹⁷⁾。ソーシャルワーク領域において、研究法をこの3つに整理すること、さらにはソーシャルワーク独自の研究法がこの下位に位置づくかどうかは議論されねばならないが、隣接する学問における指摘は参考にすべき点も多い。

ソーシャルワーク研究の場合には、どの側面から追究するかについて、まず利用者への効果的な支援を大前提とする必要がある。エコシステム構想では、利用者の生活コスモスに接近することを第一義においている。そのため支援ツールは、あくまで道具として理解し、ツールとその活用方法を包括し検討できる研究法を採用する必要がある。これまで研究会では、パイロット研究を重ね、現場のソーシャルワーカーやソーシャルワーク研究に参画する専門家のコンセンサスによって支援ツールの開発を事例研究などを通じて蓄積し追究してきた。

しかし特に支援ツールには、コンピュータを利用することと、数量表現を用いて生活状況を可視化することから、上記研究法でいえば②統計帰納法という側面から批判を受けてきた。質問回答を数値化しそれを計量するために統計帰納法を用いた検証が十分でないとの批判である。支援ツールはあくまで手段であり、利用者の生活コスモスという質的なものを目に見える形で表現するために数値を用いているにすぎない。その数値も利用者の実存を理解するための手がかりとして用いられる。しかしそのような発想があるにもかかわらず、批判を受けることもある。その批判を払拭するためには、一方で多様な角度からの支援ツールの検証も必要であり、批判は、むしろ期待の表れと前向きに理解し、支援ツールへの疑義の克服に向けた作業に取り組んできたところである。

IV エコスカナーの検証調査

1 検証調査の目的と方法

エコシステム研究会では、ここ十数年来にわたって利用者自身が納得できる課題解決を目標に、先駆的な

科学的方法と支援技術の開発を目指して研究活動を推進し、その成果について著作や論文の公刊、学会などでの発表、さらには実践での試行を重ねてきた。その反響をふまえて、ソーシャルワーク実践を進化させ、利用者の期待に応え生活支援に寄りそうことができるように開発してきた支援ツール「エコスカナー」の精緻化へのさらなる努力をしてきている。

社会福祉諸サービスの対象となる利用者の生活を支援する過程で活用可能なこのツールの開発には、ソーシャルワーク実践現場での活用可能性を検討することが一大目標である。そこで支援ツールの検証調査を実施し、利用者に参加・協働できるソーシャルワーク実践に向けて支援ツールの開発と刷新を図りたいとの意図である。

そのため今回の検証では、社会福祉現場に従事するソーシャルワーカーを対象にエコスカナーの質問項目を質問紙に起こし、2009年6～10月にかけて量的調査を行った。調査目的は、エコスカナーの質問項目の信頼性と妥当性に関して統計的手法を用いて検証すること、さらには質問項目の構成や表現、回答しやすさなどについて活用者の実感を理解し、改良に役立てることである。調査方法は、郵送調査法を採用し、縁故法によって実施した。郵送時には、5種類の資料と質問紙（①フェイスシート、②エコスカナー質問紙、③GHQ28（精神健康調査票）、④WHOQOL26、⑤コメント用紙）を用意のうえ送付した。

まず①は、回答するソーシャルワーカーとその対象となる利用者の属性を記入するためのもので、調査の基礎データを収集した。次に②③④については、①に記入したソーシャルワーカーが日頃関わっている利用者について回答する形式で依頼した。③④は、既存の調査票と比較して、②エコスカナー質問紙の妥当性を検証するために用意した。③については精神的な健康を検証すること、④については生活の質を測ることができ、両者の質問紙で把握可能な内容は、エコスカナーで把握できるトータルな生活状況と関連すると考えたからである。そして⑤については、エコスカナー質問紙に関するアンケートを行うための資料として準備した。これらに回答する際には、まず①に記入のうえ、②③④の3種類の質問紙すべてに可能な限り連続して番号順で回答するように注意書きを付加した。そして最後に、⑤に記入して返送していただくという流

れで実施した。なお②③④については、それぞれ以下に示す簡単な説明文をつけて各質問紙を用いる趣旨を明確にするように努めた。

②エコスカナー質問紙

エコシステム研究会では、利用者と支援者の話し合いやアセスメントをスムーズにし、生活とその支援状況の相互理解を深めることができるような支援方法について研究を継続している。このエコスカナーというコンピュータ支援ツールは、相談支援の際に、プログラムされた質問項目への回答により、生活支援状況をグラフなどで視覚的に把握できるように開発されている。なおコンピュータが支援内容を判断するのではなく、利用者と支援者の共通理解をうながす一つの方法としてコンピュータを利用している。本調査は、その質問項目の検証を目的としている。

③ GHQ28（精神健康調査票）

この調査票（The General Health Questionnaire - GHQ）は、英国の Maudsley 精神医学研究所の D. P. Goldberg 博士によって開発された質問紙法による検査法である。主として神経症者の症状把握、評価および発見に有効性があるとされている。簡単で、容易に、短時間に回答できること、またその回答から現在の患者自身の精神的健康-疾患の客観的情報を正確に把握し、精神的に健康であるかどうかを判定できるような工夫がなされている¹⁸⁾。

④ WHOQOL26

この調査票は、世界保健機関（WHO）が国際的に開発した主観的な健康指標である生活の質（QOL）を測定するものである。ここでは、QOL を「個人が生活する文化や価値観の中で、目標や期待、規準および関心に関わる自分自身の人生の状況についての認識」と定義している¹⁹⁾。

調査結果に関してまず、返却のあった回答は68名で、すべての質問紙に記入のあった有効回答は66名であった。そのうち男性は13名、女性は53名で、20代が25名、30代が21名、40代が13名、50代が7名であった。回答者の有資格は、社会福祉士42名、精神保健福祉士22名、介護支援専門員16名、社会福祉主事26名、資格なし8名で、その他、作業療法士や理学療法士などもあった（ただし複数回答可）。所属組織については、介護老人福祉施設、介護老人保健施設、養護・軽費老人ホーム、指定居宅サービス事業所、居宅介護支援事業所、

地域包括支援センター、障害者自立支援法に基づく障害福祉サービス事業所（地域活動支援センターを除く）、旧法に基づく知的障害者福祉施設、児童福祉施設、療養型医療機関、それ以外の医療機関、教育・研究機関、行政機関（市町村）、社会福祉協議会、NPO 団体であった。最後に経験年数については、1年未満14名、1年以上3年未満14名、3年以上5年未満11名、5年以上10年未満17名、10年以上9名、未回答1名であった。

また結果については、データ化のうえ統計的手法を用いて分析を行った。心理尺度の作成方法を参考に、エコスカナー質問紙の信頼性・妥当性について検討した。まず信頼性の分析については、128構成子すべて、ならびに階層ごとにカテゴリー分類した各構成子に関してクロンバック α 係数を算出し、内的整合性の検討を行った。また妥当性の検証については、②エコスカナー質問紙と③ GHQ28 との相関、②エコスカナー質問紙と④ WHOQOL26 との相関を、ピアソンの積率相関係数を用いて相関係数を算出し、基準関連妥当性の検討を行った。またあわせて⑤コメント用紙で得た内容に関して、そのうち選択回答によるコメントについては、平均、標準偏差を算出し、自由記述によるコメントについては質的内容及び記述分析を行った。

最後に研究上の倫理に配慮するために、高知女子大学社会福祉研究倫理専門審査委員会からの承認を得て実施した（受付番号：第95号）。また調査対象者には、書面を通して、調査の概要、データ及び個人情報の取り扱い、対象者が有する権利について説明し同意を得た。そして得られたデータや個人情報については一切公表せず、対象者や利用者個人が特定できないように留意した。またコンピュータ上では、セキュリティ対策を十分に講じて管理し、情報をデータ化して統計的処理を行った。

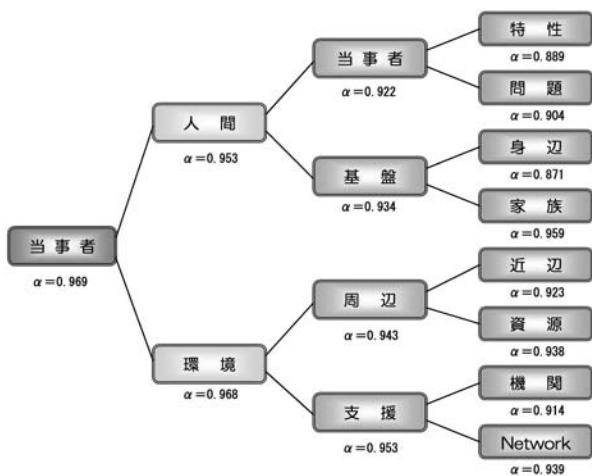
2 調査結果

1) 信頼性について

エコスカナー質問紙の信頼性を検討するために、クロンバックの α 係数を算出した。例えば小塩は、一般的に α 係数が0.8以上だと十分な信頼性（内的整合性）があるとされると指摘している²⁰⁾。特に鎌原ほかによると、クロンバックの α 係数の値について性格や態度などの心理特性を測ろうとする場合は、0.7以上が

要求されると指摘されている²¹⁾。なお本研究では、エコスカナー質問紙の α 係数について構成子ごとに検討してみたい。なぜなら現在の質問項目は、システム思考に基づき、全体構成子「生活」を起点に、領域・分野・属性・内容へと構造化されているからである。この質問項目は、全体でも各領域・分野別でも意味のあるまとまりとして成立することが期待されるからである。したがって、ここでは全体から属性までのレベルで検証してみることとした²²⁾。エコスカナーによる質問紙の内的整合性は、 α 係数をみると、全体構成子「生活」、すなわち128質問項目全体では $\alpha = 0.969$ であった。また各構成子をカテゴリー別にみていくと、図IV-1のように算出された。特徴としては、全体構成子「生活」、領域構成子「人間」「環境」、分野構成子「当事者」「基盤」「周辺」「支援」、属性構成子「特性」「問題」「身辺」「家族」「近辺」「資源」「機関」「NW」の各カテゴリーでの α 係数は、すべて0.8以上の高い値となっている。

図IV-1 各構成子別の α 係数



2) 妥当性について

本調査を実施するまでに、エコシステム研究会のメンバーで、エコスカナー質問紙の項目について精査を行ってきた。研究会メンバーはそれぞれ、社会福祉現場での現任ソーシャルワーカーやその経験のある者、もしくは社会福祉領域の研究者から構成されており、特にエコシステムという考え方に興味をもち研究に取り組んでいる。その研究会で質問項目内容の妥当性を検討したうえで、本調査を実施した。本調査を実施した結果、エコスカナー質問紙について全く回答がなかった者が2名おり、有効回答数からはずすこと

にした。しかし利用者を対象にその質問紙を利用することができた者は66名(97.1%)であり、現場のソーシャルワーカーが回答可能な項目内容であることが理解できた。

また調査結果については、その66名の回答からエコスカナー質問紙の妥当性を検討するために、③GHQ28と④WHOQOL26の両質問紙との相関を測った。その際には、客観的・数量的にとらえるためにピアソンの積率相関係数を算出した。なお算出にあたり、各質問紙の手順にしたがって回答の点数化を行った。その結果、エコスカナー質問紙とGHQ28との間には、有意な相関がみられなかった。しかしエコスカナー質問紙とWHOQOL26との間には、5%水準で有意な正の相関がみられた。

表IV-1 質問紙間の相関係数

	エコスカナー 質問紙	GHQ28	WHOQOL26
エコスカナー質問紙	-	.038	.269*
*P < .05			

3) コメントについて

最後に、⑤コメント用紙から得られた結果を示しておきたい。まずコメント用紙では、エコスカナー質問紙に関して、4つの質問を設定し、5段階評定法によって回答を得た。以下の表IV-2には、その質問項目と回答項目、そして、その平均値と標準偏差を示しているが、4つの質問すべてその平均値が3以上となっていることが分かる。

表IV-2 エコスカナーの実践場面での使いやすさに関する結果

質問項目	回答項目	平均値	標準偏差
1. エコスカナー質問紙では、利用者の生活状況を具体的に理解しやすかったですか？	⑤理解しやすかった～ ①理解しやすくなかったか	3.52	0.93
2. エコスカナー質問紙では、利用者の生活問題を具体的に理解しやすかったですか？	⑤理解しやすかった～ ①理解しやすくなかったか	3.34	1.00
3. エコスカナー質問紙では、利用者の強さ(肯定的要素)を見つけやすくなりましたか？	⑤見つけやすかった～ ①見つけやすくなかったか	3.35	1.08
4. エコスカナー質問紙では、利用者の生活の中に社会資源を見つけやすくなりましたか？	⑤見つけやすかった～ ①見つけやすくなかったか	3.09	1.00

そして最後に、具体的な自由記述を分析してみたい。コメント用紙では「回答した質問項目以外に、利用者になりたい(②エコスカナー質問紙に加えたい)質問があれば自由に記述してください」「その他②エコスカナー質問紙に関して、意見・感想があれば書いてください」という2つの自由記述欄を設けた。しかし実際の記述をみると、前者の内容を後者の欄に記載する事例もあり、ここでは両者を統合して分析することとした。分析については、まず対象者個々の記述欄から、質問紙やエコスカナー開発に重要な内容に関して、その意味のまとめりごとに抽出した。その記述に関して記述的・内容的類似性をみながら収束のうえカテゴリーを形成し、カテゴリー名を付け、その要旨を作成した。その過程を通じて最終的には、6つのカテゴリーが形成された。形成されたカテゴリーについては、以下の表Ⅳ-3から8のとおりである。

表Ⅳ-3 自由記述の内容①

カテゴリー①	対象やケースごとの質問項目設定の必要性
要旨	対象やケースによって、それに即した具体的な質問項目が必要となることが指摘された。
代表的な記述	<ul style="list-style-type: none"> ○10代の児童を想定すると、サービスやネットワークの質問ではなく、違う質問を設定しないと答えにくい。Ex. 学校や学校外活動(遊び)。そう考えると、対象によってもう少しマッチした質問項目が必要となるだろう。 ○社会的養護の場合、「措置」を「サービス」と考えてよいのか、判断に困った。 ○利用者が重度の知的障害者のため、自発的な問題解決へのとりくみを問われる項目は回答が難しかった ○家族(妻)が本人を追い詰める原因となっており、子どもは反対に協力的である場合は、どのように答えればよいのか困った。 ○(精神疾患をもつ方は、「医療」との関わりが必要であるため)医療機関の利用に満足しているか、主治医との信頼は築けているか、問題や自分の悩みを共有できる(緩和できる)場があるか。

表Ⅳ-4 自由記述の内容②

カテゴリー②	質問項目数や内容・表現への指摘
要旨	質問項目の数や内容・表現についての肯定的・否定的な指摘がなされた。
代表的な記述	<ul style="list-style-type: none"> ○質問項目が多過ぎ、また、似た設問が多いので途中、いい加減にチェックしてしまいそうという思いに駆られました。 ○質問に使用する言葉が難しく(どちらともとれる)答えにくい。 ○質問は少なくして、言葉は質素でよいと思う。あとは利用者と支援者のコミュニケーションという形で利用者の生活をとらえればよいと思う。 ○工夫という質問が分かりにくい。 ○地域ぐるみのネットワーク・サービスの意味が分かりにくかった。 ○家族の中に犬や猫のペットなどは含めて考えますか? SWからは猫が(野良猫)何匹も屋外から屋内に入り、不潔と思ったことがあります、本人はその猫のおかげで不安な気分がまぎれることがあるようです。 ○質問項目は、全体を包含しており、おおむねこの量でよいのではないかと思います。

表Ⅳ-5 自由記述の内容③

カテゴリー名③	追加質問の提案
要旨	現在の質問項目の他に追加したい内容についての提案があった。
代表的な記述	<ul style="list-style-type: none"> ○地域の社会資源が広がってきている。福祉関連以外の資源の利用が読み取れる項目、あるいは、幅広く解釈できる資源、専門職の表現が重要になると感じた。 ○満足度のようなところの回答があれば…と思います。 ○自分の今の力と現在の生活状況との関係の理解。 ○利用者ではないですが、介護者への不安や障害受容について知りたい。 ○家族の健康状態。 ○娯楽(楽しみ)について反映される質問があったらよいと思います。 ○精神面、心理面の強さを捉える質問が欲しい。 ○精神的、心理的負担(苦痛度)をとらえることのできる質問が欲しい。 ○より汎用性をもたせるという意味で、問題状況を捉える設問と強さをみつけるための設問を分けることができればと感じた。

表Ⅳ-6 自由記述の内容④

カテゴリー名④	質問紙の効果と課題
要旨	質問項目への回答を通じた効果と課題の記述がなされた。
代表的な記述	<ul style="list-style-type: none"> ○クライアントの生活背景や環境を個別的、総体的にとらえるには難しいと思いました。 ○質問紙に答えていくことで回答者自身が気づき、アセスメントに役立てるのが、答えることで自然と何か導き出されるのか活用の方法がよくわからない。 ○利用者を取りまく環境がどのような状況なのかは整理しやすかったと思います。 ○潜在的な社会資源を見つけるという点では役に立つと思います。 ○対象者の思いや強さを表現することに重点を置かれているツールということが分かります ○その人の価値観や思いといったいわゆる抽象的なファジーな部分についてフォーカスできる ○単に「できる」「できない」のアセスメントではない点がよいように思われました。 ○利用者の立場に私たちが支援者が立つことの重要性に改めて気づくことができました。

表Ⅳ-7 自由記述の内容⑤

カテゴリー⑤	利用者の立場で回答することの難しさ
要旨	質問紙に、利用者の立場で回答することの難しさが指摘された。
代表的な記述	<ul style="list-style-type: none"> ○質問に答えていくうちに、利用者の視点で本当に答えているのか不安になった。 ○本人の立場に立って支援者が記載することの困難さを感じました。 ○利用者さんに直接お聞きしたわけではないので、私の主観が入ってしまっているように思えてなりません。 ○主観の視点と客観の視点と混ざり難しい。 ○ご本人の思いを想像して記載することに、やや難しさを感じられました。 ○利用者の立場に立って回答することがとても難しく、回答者の主観が少なからず反響されているものと思われる。

表Ⅳ-8 自由記述の内容⑥

カテゴリー⑥	支援ツールとしての活用手法
要旨	支援ツールとして活用する場合の手法やメリット・デメリットが記述された。
代表的な記述	<ul style="list-style-type: none"> ○なれば分りやすく整理された質問立てになっていることがよく分かる。 ○質問紙だけで生活をとらえようとはせず、利用者と支援者の会話・対話の中でとらえればよいと思う。コンピュータを使用することは二次的なもので、生活をとらえるための生活コスモスという視点が有効だと思う。 ○対象者理解をパソコンを使って行うことや科学的にというところが、古いタイプの人間なので抵抗を感じてしまいました。 ○利用者によっては長時間のワーカーとの面接は大変負担になることも考えられるため、面接においては内容の優先順位をつけることが求められると考える。 ○利用者のどの時点での回答かというアセスメント時での特定をもらった方がよかった。それがなければ、プレた可能性もある。

3 考察と意義

以上の結果をふまえてここでは、考察をとおして支援ツールの意義を深めてみたい。まず信頼性については、全体構成子から属性構成子までのカテゴリーの α 係数が高い値を示すことが分かった。そのため支援ツールを活用する際に、そのレベルでの数値化については統計的な信頼性が確認できた。すなわち支援ツールを支援過程で活用する際に、属性構成子レベル以上で数値化、ならびにそれを通じたビジュアル化については、統計的な信頼性が確保されており、有効な支援ツールとして利用可能であると考えられる。

次に妥当性については、まず GHQ28 とは関連がないことが分かった。このことについては、エコスカナー質問紙が生活を把握するもので、精神的な健康がその一側面にしかすぎなく、そこに焦点化されていないことに起因すると考えられる。そして GHQ28 が主に神経症状を発見するために用いられる尺度であり、エコスカナー質問紙がその症状から派生する生活状況をとらえていくことに主眼をおいていることも要因として指摘できよう。またエコスカナー質問紙では、GHQ28 で問われている内容のように、個人的な事柄のみならず人間関係や社会との関連から回答する項目を内包していること、さらには GHQ28 が、精神的健康や疾患の客観的情報を明確に把握し、判定をくだすことができるように作成されていることに比して、エコスカナー質問紙では利用者の実存へ接近するための項目からなり、このことも結果に反映していると考えられる。

一方で、WHOQOL26 とは有意な相関が認められた。この点については、エコスカナー質問紙と WHOQOL26 がともに生活に焦点をおいていること、さらには回答者の主観的側面に焦点化しているという共通性に起因すると考えられる。また WHOQOL26 では、反応尺度の作成段階において、強度 (intensity、まったくない～非常に)、能力 (capacity、まったくできない～非常に)、頻度 (frequency、決してない～非常に)、そして満足度評価 (evaluation、非常に満足～まったく不満、たいへん良い～たいへん悪い) が準備されていた²³⁾。一方でエコスカナー質問紙では、ソーシャルワーク実践構成要素である価値、知識、方策、方法から導き出された内容をふまえて尺度作成を行っている。それは、価値 (関心や姿勢など: ex. 関心がない～関心がある)、知識 (現状や理解など: ex. 理解していない～理解している)、方策 (計画や見通など: ex. 見通しが無い～見通しがある)、方法 (対応や努力: ex. 対応していない～対応している) などである。このような尺度作成における差異についても、相関に影響していると考えられる。

最後にコメント用紙の結果をみていくと、まず4つの質問結果がすべて平均3以上であった。例えば質問項目1. 生活状況への理解については、平均値が3.52 である。エコスカナーによる生活状況理解への効果に関する研究には、太田ほかなどがある²⁴⁾。それらの研究は、実践ではなく教育場面でのエコスカナー活用によるトレーニング効果を検討したものである。単純には比較できないが、そこでは今回の研究よりも生活状況理解への効果が高い。理由としては、①実践場面ではなく教育場面であったこと、②教育場面ではトレーナー (指導者) が存在し、活用方法などの解説を行っていること、そして③質問紙のみではなくそれとほぼ同様の質問項目を搭載したエコスカナーを用いて検討していること、などが主に考えられる。

特に③については、質問紙のみではなく改めてビジュアル化による視覚像の有効性が指摘できるのではないだろうか。そしてその効果をさらに高めていくには、エコスカナーの使い方を含めたソーシャルワーク支援における活用方法をトレーニングしていくことが重要であるといえる。これまでも太田ほか²⁵⁾ などによって、教育場面での活用方法について解説してきたが、今後は実践場面での活用に向けてさらなる

ツール改良はもちろん、その活用方法を研修やスーパービジョンをとおして教育していくシステム構築を急がねばならない。

この点については、自由記述にも現れている。自由記述をみていくと、対象やケースごとの質問項目設定の必要性、質問項目数や内容・表現への指摘、追加質問の提案などのカテゴリーにみられるように、ツール開発・改良に向けての重要なアイデアを得ることができた。それに加えて利用者の立場で回答することの難しさ、質問紙の効果と課題、支援ツールとしての活用方法などのカテゴリーを含めた具体的な記述のなかには、研修やスーパービジョンにより教育を受けることで解消できる指摘²⁶⁾もあり、これらの自由記述の結果からも教育システム構築の必要性が指摘できるのではないだろうか。一方で質問紙の効果と課題についてのカテゴリーをみると、質問紙のみでも十分な効果があることが理解できる。しかしそれ以上にエコスカナーとそれによるビジュアル化は、さらに効果を高めることが期待できる。そのためさらにエコスカナーを支援ツールとしてビジュアル化した生活をトータルに検討する方法へと開発することに大きな意義があるといえよう。

V おわりに（今後の課題）

エコスカナー質問紙を通して、その統計的な信頼性や妥当性、ならびに質問紙、支援ツールの改良点について検討してきた。統計的な有効性を担保していくためには、必ずしも今回の結果だけでは十分とはいえないかもしれない。さらに継続的な調査を進め、調査人数の不足により実施することができなかつた因子分析などを行いながら検証することが必要であろう。例えば信頼性については、属性構成子までの階層ごとの α 係数を算出したが、因子分析を行う場合、どの階層から分析するかを検討する必要がある。全体を通して因子分析をふまえた構成にするのか、「人間」と「環境」の領域構成子ごとに分析し、その結果を統合した構成にするのか、ツール利用方法や対象者選定など、検証の可能性に応じた選択が必要となろう。またその結果を反映して、その階層やそこに内包される内容が妥当かどうかをさらに検討することが求められるであ

ろう。しかし現時点において、エコスカナー質問紙の信頼性と妥当性が一定程度確保されているという検証は裏付けられたと考えられる。さらに今後の継続的な研究に期待したい。

一方でコメント用紙からは、エコスカナーの支援ツールとしての活用効果、その活用へのトレーニングが可能な教育システム構築の必要性と、ツールを介したビジュアル化による効果が理解できた。単なる質問紙や尺度としてではなく、アセスメントを中心としたソーシャルワーク支援過程を通じて、利用者とソーシャルワーカーが利用者の生活コスモスにいかに関与できるか、そこに力点をおき今後も開発を継続していく必要がある。なぜならエコスカナーは、ソーシャルワーク支援過程で活用する1つのツールであり、それのみによって問題を診断したり、生活を評価することはないからである。質問紙自体に統計的な信頼性や妥当性があることも、利用者を支援する際にエビデンスに基づく実践展開として望まれることであるが、それによって利用者やソーシャルワーカーにとって生活コスモスへの接近に向けた支援ツールの利用しづらさ、分かりづらさが生じては本末転倒であるからである。
(西梅 幸治)

注

- 1) 太田義弘編『ソーシャルワーク実践と支援科学』相川書房 2009年 224-260頁 業績年表参照
- 2) 太田義弘・安井理夫・小築住まゆ子「高度専門職としてのソーシャルワーク実践の役割と課題」『関西福祉科学大学紀要』第13号 2010年 3-6頁
- 3) 日本社会福祉士会『専門社会福祉士認定システム構築に向けた基礎研究事業報告書』専門社会福祉士研究委員会 2010年 7-9頁
- 4) 太田義弘編 前掲書 261-262頁
- 5) 太田義弘・中村佐織・石倉宏和編『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング／利用者参加へのコンピュータ支援』中央法規 2005年 8-12頁
- 6) 同書 18-22頁
- 7) 同書 28-32頁
- 8) 太田義弘「ソーシャルワーク実践と科学化への方法」『関西福祉科学大学紀要』第12号 関西福祉科学大学 2009年 15頁

- 9) 同論文 14 頁
- 10) 西梅幸治「支援ツールの活用方法」太田義弘他編 前掲書 70 頁の作表を部分改訂
- 11) 安井理夫『実存的・科学的ソーシャルワーク／エコシステム構想にもとづく支援技術』明石書店 2009 年 97-101 頁
- 12) 太田義弘編 前掲書 6 頁
- 13) 太田義弘「ソーシャルワーク実践へのエコシステムの課題」『ソーシャルワーク研究』vol.16 No.2 相川書房 8 頁
- 14) P. Lehmann and N. Coady eds., *Theoretical Perspectives for Direct Social Work Practice : A generalist-Eclectic Approach*, Springer, 2001, p.66.
- 15) 太田義弘『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠信書房 1992 年
- 16) 今田高俊編『社会学研究法 リアリティの捉え方』有斐閣アルマ 2000 年
- 17) 今田によると社会学における研究法は、①万有引力の法則やエントロピーの法則など普遍的に成り立つ理論法則によって現実を認識する《数理演繹法》、②実験や大量データから一般化された経験法則によって現実を捉える《統計帰納法》、および③個別で 1 回限りの事象から物事の本質を解明する《意味解釈法》の 3 つに大きく分類されている。同書 4 頁
- 18) 中川泰彬・大坊郁夫『日本版 GHQ 精神健康調査票 手引』日本文化科学社 1985 年
- 19) 田崎美弥子・中根允文『WHOQOL26 手引 改訂版』金子書房 2007 年
- 20) 小塩真司・西口利文編『質問紙調査の手順』ナカニシヤ出版 2007 年
- 21) 鎌原雅彦・宮下一博・大野木裕明・中澤潤編著『心理学マニュアル 質問紙法』北大路書房 1998 年 102 頁
- 22) 内容構成子については、エコスキャナー質問項目を直接反映しており、その項目がソーシャルワーク実践構成要素である価値、知識、方策、方法から導かれたままとまりであるため、これより上位の構成子とはカテゴリー化した方法と意味合いが異なる。そのため今回は、全体から属性までの構成子で信頼性を検討した。
- 23) 田崎美弥子・中根允文 前掲書 5-6 頁
- 24) 太田義弘・野澤正子・中村佐織「ソーシャルワーカーへの支援スキル訓練の研究／コンピュータ・シミュレーションを用いた実践教育の展開」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』第 6 号 龍谷大学国際社会文化研究所 2004 年
- 25) 太田義弘・中村佐織・石倉宏和編 前掲書
- 26) 例えば「地域ぐるみのネットワーク・サービスの意味が分かりにくかった」「質問紙に答えていくことで回答者自身が気づき、アセスメントに役立てるのか、答えることで自然と何が導き出されるのか活用の方法がよ

くわからない」「質問に答えていくうちに、利用者の視点で本当に答えれているのか不安になった」「対象者理解をパソコンを使って行うことや科学的にというところが、古いタイプの人間なので抵抗を感じてしまいました」「利用者のどの時点でのエコスキャナー入力かというアセスメント時での特定をしてもらった方がよかった。それがないため、ブレた可能性もある」などの記述がみられたが、これらはエコスキャナー活用方法の十分な解説とトレーニングによって解消していくことができると考えられる。